

巨大企業に巣喰う 獅子身中の虫は誰か



15000対38 三菱長崎造船労働組合員たち

鎌田 慧

違法ロックアウトに勝利した組合員は、門を乗り越えて工場へ

八〇、〇〇〇対三八

三菱重工株式会社
従業員総数約八万名
長崎造船所総数一万五千名
全造船機械労組長船分会(第一組合) 四三〇名
同盟三菱重工労組長船支部(第二組合) 一万四千名
三菱長崎造船労組(第三組合) 三八名

資本金一千五十二億円、年間売り上げ高約九千億円、軍需生産のトップメーカーである三菱重工労働者の九九・九パーセントまでは同盟三菱に包摂されている。この中で第三組合である長船労組の比率は八万名対三八名であり、長崎造船所に限ってみるだけでも、一万五千対三八であって、同労組は巨大企業における極小組合でしかない。が、この聞き慣れない第三組合を名乗る小集団は、「世界の三菱」の五臓六腑をひとときの休みもなく駆け回り、まさに、「獅子身中の虫」として、世界市場をも征覇した王者に、決して安らかな日々を与えていないのである。たとえば、日経

彼らの人間性

こうして彼らは新たな道を歩き始めた、六〇年から。六〇年の単語を見て、なにかしら、胸の疼くを感じるひとは、少なくあるまい。やはり私もまたその一人なのだ。あれ以降、自分は何をして来たか、何をして来なかったか。そしていま何をしているのか。これまで、ときどき、長崎での社研の運動は活字で眼にしていた。第三労組結成のニュースも、いま何によってか定かでないにしても、聞いて知っていた。

昨年八月、全国労働組合活動交流集会で、彼らがロックアウトに対していかに闘ったかを聞くことができた。長崎へ行こう、そういう気持が固まって来たのは、その時からである。六〇年、共産党から離党して彼らはどう闘い続けて来たのか、六〇年から私はどうして来ていたのだろうか、彼らとの対話を通じて、自分の中で何が明らかになるかもしれない。私の中にも恐れがある。六〇年以降の自分の姿を余り厳しく捉えたくない、そんな怯懦がある。それもゴリゴリの人間たちに批判されるのも、消耗だなあ、といったよう

獅子身中の虫は誰か

連が七二年に発行した『職場における左翼勢力の実態とその対策』において、これら少数組合の存在は、「日共以上にやっかいな事態に直面することが想定される。七〇年代の企業への大きな挑戦として、覚悟をきめてかからねばならない」と警戒されているのである。このように、新しい運動を志向する労働者たちの間で、いやそれより以上に、独占企業の経営者の間で、強い関心を向けられている長船労組三八名とは、極めて異質な労働者たちであるだろう、と考えられるだろうし、私もまたそう考えていたことを告白しなければならぬ。

三一書房から刊行されている『新左翼労働運動10年』I、IIおよび『左翼少数派労働運動』には、あの六〇年から七〇年九月、ついに第三組合結成までの、はるかに歩いて来た彼らの闘いの記録が収録されている。この本の最初にはこう書かれている。

なぜか、その日の記録は残されていない。薄暗い六畳の部屋に、一〇人があつまっていたのは、たしか一九六〇年五月のある日であった。共産党の場合と異なり、結成と加盟の決

意書には、「共産主義者として生涯を闘う」とみんな短くかいた——その一行に、お互いの万感の情がこめられていた。

当時、学生戦線とちがって、労働戦線の新たな闘いは、まだ星雲状態の域を出ていなかった。

三菱長崎造船一万二千名の中の一〇人であることにためらいはなかったが、日本中どこにも相談相手のいない心細さは、ときとして耐えがたい不安をもたらした。ましてすでにソ連をはじめ自称「社会主義国」に裏切りの屍臭をかいでしまった私たちにあって、全世界への挑戦は、気も遠くなるような無力感と怯懦をしばしば伴った。

しかし、資本との闘いに日々をさらしている労働者にとって、進むか退くか、所詮「静止」は許されなかった。

私たちは心にきめた。——既成の処方箋がない以上、すべては自己をかけた試み以外にない。失敗を恐れて無にとどまるよりも、かりに血反吐にそまつた残骸をさらそうとも、その歩みのすべてを通して、労働者はいかに闘い、いかに闘ってはならないかを、示しうるような、そうした生涯を貫くのではないかと。

な逃げ腰がある。が、しかし、彼らは労働者として現場で働いているのだし、それに、彼らの文章は、ある種の優しさを伴っていた。それは彼らの闘いの柔軟性と、それを支える人間性を確信させた。六二年六月、大正炭鉱の争議に向けられたピラにはこう書かれていた。

大正の兄弟たち！

あんたらは、炭を掘り、おれたちは、船をつくる。山と海では大変なちがいが、それでもおれたちはやって来た。

……

ダラ幹の「指導」——敗北のおしつけをきっぱり返上しよう！！

そして、断固として、妥結に反対し、独走でも闘う構えを、海のおれたちみせてくれ！！

闘う山の決意をおれたちみせてくれ。あんたらの闘いが、あんたらの闘いだけでないことを初めにかいた。

あんたらの今日の投票には、おれたちの運命もかかっていることを忘れてくれるな！

闘う一票を！ 闘う一票を！

ドレイの投票か、それとも自分の未来を自分の手でできりひらく決断か！

ダラ幹がひたかくしにしている妥協なき闘いの戦術——鉱山占拠へ！！

少数なれど孤立せず

長崎港は浦上川から拡がる細長い入江である。一八五七年（安政四年）、幕府が「長崎鎔鉄所」を、この川から海に向って右岸の地に創設、やがて完成したドックなどが、三〇年後の一八八七年（明治二〇年）、三菱社に払い下げられた。その後の戦争の度毎に拡大し続けた三菱造船所は、百二十年間の永きにわたって世界の海にキナ臭さを漂わせて来たのだ。長船労組の組合事務所は、この造船所を取り囲む古いレンガの塀から、少し山側に登った所の木造の民家を借り受けて設けられていた。粗末な木のドアを押すと土間に事務所机が二つ向い合せに据えられ、壁に沿って書類棚が整然と並んでいる。奥が八畳ほどの会議室。別室からは、明朝、一万五千名の全労働者に配られるピラが、二台のタイプ印刷用輪転機から鈍い唸り声を立てながら飛び出していた。

集まって来た人たちと挨拶がすんだ後、私も、少しでも多くの組合員と、それも年齢的にも、思想的にもちがう労働者とじかに会いたいという要望を入れて、テキパキと一週間ほどのスケジュールが作られた。夜は、各組合員の家に順番に泊めてもらって、そこでもゆっくり話し合う態勢を作ってもらうことにした。それは誰かが強制的に押し付けたものではなく、ごく自然に自発的に決まった。中に三日間の連休をはさんでいたのだが、その間、私と会うためにだけ、わざわざ組合事務所まで出てくるメンバーも決まったのである。それは何よりもこの組合の民主性と集中性を物語っているように、私には思われた。

まず、最初に泊めてもらったところは、組合事務所のおく裏にある草野さんのお宅である。彼は鋳物工場でプロペラを作っている労働者であるが、彼については、東京での反戦デモに参加して解雇された、「三君を守る会」の運動に参加して来たある労働者が七〇年一月にこう書いている。

……守る会のピラをつくりに行つて又驚いた。真中をフスマでしきつた二部屋が草野夫妻の家であったが、そのうちの二部屋

が完全に事務所化されていた。古びた印刷機は容赦ない音をたてて12時前に一万二千枚のピラを刷りおえて止まった。「大変だなあ遅く迄」と言った私に「朝迄かかる時もあるよ」と草野君が答えた。「この音じゃねえんだらう」と再度聞いたら「なれたらそうでもないが、機械が故障したら何時であれフスマを開けて起こされる時もある」私は帰りに草野夫妻に同情した。「子供が出来んのはこのせいかな……」と。

資本主義への怨み

私が伺った時もやはりフスマでしきつた二部屋の家だった。印刷機は組合事務所に移されて、壁にはインクの跡が残されていた。それでもやはり同じような忙しい生活が続いているためか、やはり子供は生まれていなかった。酒を呑みながら私たちは話した。草野さんは養成工（技術学校）出身者であり、この組合のほとんどの人たちは、中卒＝養成工のコースをたどって活動家になった人たちだった。彼は三六歳で勤続二年、ほかの人たちも二十年前後の勤続年数になっていた。このことがこの組合のひとつの特徴であることを

知ることができた。つまり職場の中では同僚たちと古い付き合いがあり、仕事もでき、人間的な信頼感をかち得ている労働者たちだからこそ、極小組合でありながら、孤立していかないのである。しかし、どうして養成工出身者がこの組合を支えているのだろうか。私の知っている限りでは、養成工はその三年間、徹底して企業意識を植えつけられ、現場に出た後、下級職制への道が開かれているため、労働運動の活動家になるよりは、職制を志向している、というのが通常だったからである。この疑問は、後でもさまざまな人たちにぶつけてみた。彼らの言い分はこうである。

どこの地方の中学校にでも、成績は学校でも一、二番でありながらも、家が貧しいために進学できない生徒たちがいる。彼らの向学心とプライドとコンプレックスは、長崎県の場合、多くはそのまま、「三菱」の企業内学校に吸収される。貧乏の無念さは貧乏人の子弟が一番良く知っている。しかし、彼らの向学心と向上心とプライドに対して、その「学校」も、工場もまた、たちまち大きな幻滅を与えずにおかない。所詮、彼らは良質な労働力として厳選されただけのことなのだから。やがて年を経て、彼らより成績の悪かった同級生

たちが、学校を出て入社し、彼らの上司としてやってくる。能力の差ではなく、貧富の差だけで人間の一生が決まることの実物教育が始まるのである。ある人たちは、それも多くの人たちは、諦めからマイホーム型の労働者になるだろう。「せめて子供だけは学校へ」。ある人たちは、資本主義への怨みを、そのまま自分が出世するためのエネルギーに燃焼させるだろう。「貧乏生活はもう沢山だ」。が、ほかの人たちは、貧乏人に徹し切るだろう。貧乏なら貧乏でいい。貧乏人が主人公になる社会にすればいい。そんな自信を持つ。もしも、と私も考える。もしも自分が間違つて金持の家に生まれていたら、いま頃どんなさまざまな生活をしているだろうか。金が無いのは困るけど、でもやっぱり自分の場合は、貧乏人でもよかったのだ、と私は正直思っているのだ。

女房「私でよかつたら」

長崎造船所での共産党員や社会党員たちは、六〇年以後「社会主義研究会」を作り、やがて反戦派労働者三君の解雇問題をめぐって第一組合から出て第三組合を作った。この組合

ガードマンを従えて工場内をデモする



占化へのいち早いスタートを切った。と同時に、合併を成功させた資本と、それに協力する右派幹部は、労働組合をもまた右翼的に再編成し、合理化をよりスムーズに遂行する態

勢固めを図った。こうして、翌六五年十二月、中立労連傘下の全造船機械労組の大手で最強を誇っていた長船分会に第二組合が結成され、三菱系各分会は企業連合体に組み込まれ、やがて分裂は日本鋼管、石川島播磨などの大手や中小各造船所に波及し、全造船機械の組織人員は当初の七万八千名から現在の一万名へと激減してしまった。つまりこれらの大分裂の上に、合理化が進行し、「造船王国」が築かれているのである。

七三年四月から、週休二日制（八時間労働）が開始された。これらの「時短」に伴ない、資本の側は労働時間の始終業時刻の管理を徹底させた。これによってこれまでの既得権は一方的に奪われ、朝八時にはすでに作業衣に着換えての体操が始まり、入浴も午後四時の終業後によりやくできることになった。これまでは八時にタイムリーダーを打刻すれば良かったし、四時前には風呂に入っていたものだった。「汚れ落とし時間のうち」。これらが造船労働者たちの永い間の労働のしきたりだったのである。私が朝食会で会った中老の労働者は、これまでの過去三十数年間、八時ちょうどに門をくぐって「門札」をひっくり返して出勤となり、それから現場までぶ

らぶら歩き、着換えて一服つけてからその日の仕事に取りかかったものだった。十二時のサイレンが鳴る前にはもう屋敷は済んでいたし、終業時間の数十分前には風呂に入っている日の労働の疲れと汚れを落す。これが企業も認めていた労働の慣習であり、そうでありながらも企業は、心配するまでのこともなく儲けて来たし、膨張し続けて来た。

六月からは現場に移動させていたタイムリーダーも廃止して、「面着制」が実施された。つまり八時の始業時にはすでに現場に着き、作業する態勢で職制の前になければならないことになったのである。朝からビールを呑んでいた労働者の無念さは、たしかに一分遅れて行けば三十分の賃金が引かれることになったかもしれない。しかし、決してそればかりではなく、それほどギョウギウギ縮めつけられて仕事をさせられる馬鹿らしさと無念さへの無言の抵抗だと、私には思える。資本もまた、三十分の「罰金」を取ることで少し儲けようなどとケチなことを考えている訳ではない。労働者を人格のない労働力としてだけ、トントンまで支配管理しようとして、ただのただのことなのだ。支配者は全てを支配したい欲望を持つ。

に真面目な養成工出身者や、年配の労働者たちが参加して来たのである。草野さんのことを書いた労働者はそのあとの文章でこう書いている。

私はぼろぼろはい出すことから始めることにした。初めから走り出してころんだら何にもならない。ゴールまでたどりつくことがもともと大事なことである。これまで組合のビラさくばったことのなかった私にとつては、ビラはともかく箱を持ってカンプに立つことだけはカンベンしてくれと言いたかったが、やめて従うことにした。ハリストを、機動隊との闘いをと言われてことわっていたら、自分はいったい何ができるのかと思ったからである。

原爆で私の姉が死んだ時、幼い私はアメリカをにくんだが、私の姉の仇はアメリカだけでなく、日本にもいたし今もいる。三君もその為めに闘ったのだ。

私も歩き始めなければいけない。不信と憎悪に別れを告げて、反戦平和の闘いを長船労働者は長船の中からおこして行こう。その先に真の統一と団結はまっている。結婚前、「俺がくたばる迄めんどろみでくれ」

と言った私に、「私でよかったら」と答えた女房と子供の三人で生きて行く。皆で安心して生きていける日に向かって。

一分遅れて三十分

翌朝六時に起きて草野さんはバスに乗り、「社船」が出る棧橋に立った。霰が降り出した。まだ暗い街角から、オーバーヤジャンパーの襟を立てた労働者たちが無数に現れ、それぞれ足早に、棧橋を渡った。その先端には三階建ての、大きなビルのような双胴船がまだ眠たげな灯をぼんやりともしていた。この船は、労働者たちをそれぞれの現場まで運んで行くのだった。「どれい船」、ついさいきんまでそう呼ばれていたという。ただ労働者を運ぶためだけに作られた船。これまでは型も古く、色も褪せ、乗る人間たちにとつても、憂うつなものでしかなかったのだ。草野さんは、第三組合は春闘で六万円の賃上げを要求したことを訴えていた。霰の中でマイクを握る草野さん、足早に通りすぎる数千の労働者たち。朝がようやく始まりつつある。

組合事務所に戻って近くのめし屋へ行くと中老の労働者が一人でビールを呑んでいた。

静かな眼をした人だった。私たちが昔の労働現場の話をしていると彼も話に加わって来た。昔は、そうだ、昔は良かった。仕事時間中でも、製品の陰で花札をやって遊べたものだ。魚を釣っておかずにして食ったり、夜抜け出して丸山町へ女郎を買って行った連中もおった。それはともかく、十二時のサイレンが鳴った時は、もう飯を食い終っていたものだ。三五年勤務の造船工だという彼はそんな話をした。いつ頃から変わってしまったんですか。二組ができてからなにもかも変わってしまった。彼自身二組の組合員であるにもかかわらずそう言った。今日は休むんですか。いや、九時から行くのだ。いまは一分遅れていっても三十分の給料が引かれるようになった。頭にくるから酒呑んで、一時間遅れて行くんだよ。そっちの方がすっきりしていい。相変わらず静かな眼でそういうのである。

何が造船王国を支えるか

一九六四年六月、三菱日本重工、新三菱重工、三菱造船の三菱系三重工は、「国際競争力強化」を目標に合併、石川島重工と播磨造船の合併に続いて、その後の業界再編成と寡

たとえば、現在のベルトコンベアでの労働が支配の完成された姿を示している。八時の始業開始と同時に、ベルトコンベアは廠かに回り出す。その前に労働者たちは工場の門をくぐり、広い構内を歩いて現場に到着し、着換えし、ミーティングで職制から指示を与えられ、煙草を銜えてトイレに走り、自分の持ち場について作業開始の準備を完了させていなければならない。そしてコンベアがいったん回り出せば、もうトイレにも行かず、煙草を吸う暇もなく、一秒も休むことなく、物も言わず、無意味な機械的な動作を繰り返すだけだ。それはもう人間としての労働者ではなく、エネルギーとしての労働力そのものでしかない。

りを破壊してまでも、管理を強化しようとしているのだ。コンベアは権力の意志そのものなのだ。それと同じように、職制による面着の導入は、職制を媒介とする資本の意志、支配の強化以外のものではない。

第三組合は、この一方的な権利の盗奪、支配の強化に対して、身を挺して反対して来た。八時入場、終業時十分前入浴を貫いて来たのである。彼らの率先した行動によって第二組合員たちも彼らの後についてついに入った。労働者なら誰だって、一分でも早く仕事から解放されたい。まして、ついでいきんまで、それが当り前の慣習だったのだ。三〇数名の毅然とした行動は、職場で共感を巻き起こし、ついには六百数名の時間内入浴闘争となって拡大して行った。

たたかいが蔭の共感を

人間の労働は決してこのようなものであってはならない。時々同僚としゃべったり、煙草を吸ったり、それは花札をやったり、魚を獲ったりするほどのことはないまでも、疲れれば息抜きし、息抜きすればまた取りかかる、これがごく自然のあり方だ。しかし、資本は、資本の人格的な表現としての資本家は、より多くの剰余価値を吸収するためには、全てを支配し、思い通りに使いたい根源的な衝動を持つ。だからこそ、労働者の永い間のしてきた

七三年十月二五日早朝、三菱重工長崎造船所管理課員は、長船労組委員長宅へ「就労拒否の件」と題する文書を持参した。労働者八万人を誇る企業が三〇数名の組合員に先制ロックアウトをかけたのである。ロックアウトの理由は、第三組合の始終業管理反対闘争

が閉ざされた門を乗り越え、構内デモ。見物していたおよそ三千名の労働者たちの歓声がどよめく。

「ロックアウトは粉碎されたぞー！」

「われわれは勝利したぞー！」

なんどもなんども勝利のシュプレヒコールが繰り返された。

今年五五歳のある組合員はこう書いている。

い。強行就労で職場にやっと坐り込んだ時、同僚達がアカの他人の様に顔をそむけ、迷惑そうにしていた事を思うと、仲間が信じられない気持ちで一杯だったが、やはり少しでも仲間を疑ったのが恥しく思われる。

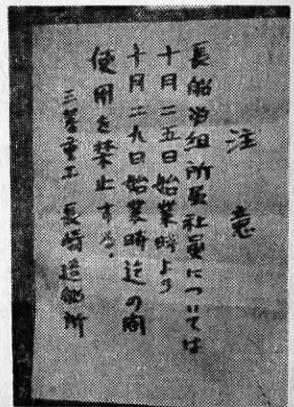
職制の監視の瞬間のすきを見て、手まねで情報を知らせてくれた人、夜、電話で「名前を聞かないでくれ、防衛隊が増強される立神各門からの入場は不可能だ。八軒家門が手薄と思う」と、連絡してくれた人。そして、「君達の宣伝カーがドック上の丘からP棟控所に放送しているが、各窓側には命令で誰もいない。立神正門からやった方が良いと思う」と、知らせてくれた人もいた。

四日間の激闘で、定年前の私は疲労でやつと玄関を開けると、「よかったね。裁判所で、お父さんの方が勝ったんだってね」と、家族全員が飛び出して来た。今朝までの不安の顔は喜びにあふれる笑い顔である。

さっき、第二組合員という人がビールを持って来て、「お目出度う御座居ます。本当に良かったですねえ。私達は何んにも協力できなかったが、心配してました。中村さんたちの勝訴で嬉しく、御祝いに、気持だけでも、ビールを持って来ました。一杯飲んで祝って下さい。私達の気持をおかして下さい」と、言ってビール三本を置いて行ったそうである。名前を聞いても答えなかったというので、誰かと心当りを考えてみたが、人相年齢からしてわからな

又、何日か後、家内と街で食事をしてい

る時、「中村さん、奥さんとですか。ロックアウトの時は本当に済みませんでした。私達も上司の命令であった達に同情していても、役目として嫌や嫌やがらした事なので許して下さい」と、テーブルまで来て言訳して行った防衛隊の隊長格の職制の人もいたが、逆に防衛隊を出世の機会と張り切り、課長達の前で、私を罪人のように扱った奴、他の防衛隊員が制止しても、便所



組合員の受持機械に貼られた会社の宣告

の中で私について来た奴等、闘いの中で、初めて人間の本心がおわかるものだと思った。会社が何と掲示板に書こうと、全職制が時間中に第三組合の悪口を言っても、職場の中には私達を理解して協力してくれる仲間が数多くいるのだ。一歩門を出ると多勢の人々が私達に応援してくれる。私は其の人達の為に自信をもって進んで行きたいと思う。

多数派の方が心細いのだ

この筆者の中村直士さんは一九五七年、三三年後に、それでも人より早く本工になった人である。当時本工になることは大変な事で、上役につけ届けをし、それが報いられると、「仲間入り」というので、上役、同僚などを料亭に呼んで盛大にご馳走しなければならぬほどだった。臨時工の存在理由はおくまでも景気変動の安全弁でしかないし、五四年当時の不況時には二千名ほどの首切りもあって、誰しも一日も早く本工の安全地帯にはいることだけを夢みていた。彼が人より早くその地位に達し得たのは、上役への供応のためでも、



誰であれ、殺された仲間のために……

スト権を確立、三日後には二〇名がストを実施して裁判の傍聴に出席している。これらによって、一年半後に解雇無効の勝訴となった。この組合はストの通告権を各個人に委譲しているため、組合員個人が自己の判断によって、必要と思われる時にストを決

行でき、その創意性と独自の行動によって、さらに組合が強化される運動を特長としている。それぞれが自分の能力に応じた闘いを行なうことを組織的に保証し、常にあらゆる法律の遵守を会社に要求して闘い、死亡災害事故が発生した時には、その犠牲者が本工、下請、一組、二組員たるを問わずストライキを決定して現場に行き、抗議集会を開き、遺族たちの委任を受けて補償交渉を行ない、あらゆる労働者たちからの信頼を得ている。そして前にも述べたように、時短などの既得権侵害には実力闘争によって、八万三菱労働者を代表する闘いをも構築し得るのである。

一週間たつて帰る日の朝、棧橋へ行ってピラ撒ぎに参加した。暗い街角からふくれ上がつて押し寄せる労働者たち。ポケットに突っ込んでいたゴツイ手が差し出されてピラを受け取る。ピラを握る手。手。手。私はゆうべ集まってもらった労働者たちの話を思い出していた。この労働者たちは二組結成と同時にアツという間にいなくなってしまう人たちだ。それもかつて、核兵器エリコン陸揚げ阻止闘争を闘った労働者たちだ。形勢不利になれば黙り、形勢有利になればダッシュをかける。この振幅がそのまま労働者の英知なのだ。



真面目で働き者だったせいだけでもなく、組合活動に熱心だった（長船は臨時工も組合員になれるほど労働運動の伝統があった）からである。「あれを常備にすれば、年も年だし、温和しくなるだろう」そんな狙いが会社側にあったのだろう、と中村さんは苦笑している。彼は「満州」（中国東北部）で生まれ育ち、「満鉄」の事務員だった。そこで見ていた中国のクーリーと、三菱の臨時工はまったく同じ存在、ただ棒切れで殴られないだけのちがいで、そんな認識から組合活動に熱心になったのだという。

中村さんの賃金等級は技能職三級というもので、労働者の最低で手取り七万円ちょっと。同僚はすでに監督工だから十二〜十三万円。第三組合員であるだけで半分ほど低い賃金になっている。彼の場合は勤続年数が短い方になっているが、だいたい第三組合員でいると残業も少なくされるので三万円以上の減収になっているという、が、中村さんはこういう「金銭も出世も投げてしまえば、むしろは締めようがない。こわいものなしですよ。みんなはあまりにも権力に対して卑屈になりすぎているのではないか。権力をあまりにも過大

評価しているのではないか」

職場の同僚たちは折り合いが良い。職制も中村さんがなまじつか仕事ができるから第三組合のイメージが変わってしょうがない、とこぼしているという。同僚たちがいう。「あんたこの組合がもっと太うなると、わしらも行くよ」

五一歳の城谷さんは、第三組合員は胸を張って第三組合だといえる、第二組合はそうはいえない、こっちの方が気を大きく持って精神的に楽だ、という。彼は敗戦の前年ミシダナオ島に上陸した時、その広大なヤン林に、「三菱商事所有林」という立て看板があるのを見ていた。戦友たちはびくりにしてこういっただけ。「三菱さんは早やかね。軍隊よりも資本の方が先に上陸していた。軍隊は資本を守るために上陸する。この真理をこの時理解したのだそうだ。

五七歳の栗原さんは三君の解雇を認めた第一組合に見切りをつけてこの組合に移って来た。敗戦後から執行委員を勤めて来た長船労働運動の長老だ。「この連中は終戦当時のフナイト組と同じですよ。なんでも気合いかけてやらんといかんですよ。彼はロックアウトの時、まっ先に門を突破し、横断幕を持

って千メートル以上走った。組合員で一番先頭だった、と自慢した。こんな人たちが、二十四時間監視態勢の造船所の中で少数組合を支えているのだ。元日共黨員、元社会黨員、公明黨員、天皇制支持者、神を信じる者も、神を信じない者もここにはいる。労働組合だから当たり前といえれば当り前のことなのだが。

この一月、第二組合から移って来たばかりの二六歳の労働者がいる。勤続十一年。彼がいるエンジン組立て工場は五百人。そのうち第一組合員十五名。第三組合員は彼一人。職場ではあいつと話すな、と職制に同僚たちはいわれている。「心細くないですか。二組にいた方が心細かったな。もしほくが敗けそうになっても、いまでは第三組合が付いているもの」。十五年勤務の労働者はこういふ。「こっちに来て肩の荷が降りた。月給が下がって女房は文句をいうけど、いまは職制も寄り付かないし気楽でいいや」。

労働者とは何だろうか

七〇年九月、反戦行動参加を理由に解雇され、第一組合から見捨てられた三君を抱えて長船労組は出発した。そしてすぐ解雇撤回の

このエネルギーを信頼するのだ。このエネルギーをいかに引き出すかが問題なのだ。第三労組が優勢になるとアツという間に集まってくるだろう。そんな話だった。眠れる獅子たち。逃げるばかりではなく、必ず立ち上がる労働者たち。社船に乗ってクレーンの林立する岸壁に向かう時、山の上から陽が射した。船の上に立ち、寒さの中で身をすくめ、おし黙りながら、近づく工場を見つめる顔々に陽が射した。それは印象的な一瞬だった。

「連帯を求めて孤立を恐れず」。これが長船労組の機関紙のタイトルである。労働者の自由と解放は、闘いの中からしか生まれて来ない。この平凡な真理を一番良く知っているのは、毎日現場で職制と、そして自分と闘い続けているこの長船労組の人たちだろう。